



戦争犯罪者のお念仏	1
生涯を支える幼児期の教育	2
福祉の視点から見る 「生きる」ということの尊厳	3
お伽草子に見る転生観	4

同朋大学 “いのちの教育” センター
〒453-8540 名古屋市中村区稲葉地町7-1
TEL 052-411-1373
Eメール宛先 inochi@doho.ac.jp

● 同朋大学 “いのちの教育” センターだより

「新型コロナウイルス感染症」をめぐる状況は新たな局面を迎えようとしています。今年度は新型コロナ対策を講じつつ、対面形式で講座を行いました。その全5回のうち、4回分の概要を収録したのが今号です（残る1回は次号掲載予定）。巻頭は特別講師としてお話しいただいた青木馨先生の文章です。講座内容から、戦争とは何か、平和とは何か、そして「いのち、とは何か、という問いを確かめ、緊迫する現代の世界情勢との向き合いかたを考えたいと存じます。

2023.3.31 NO.57

戦争犯罪者のお念仏

青木 馨

『A級戦犯者の遺言 — 教誨師花山信勝が聞いたお念仏 —』（法藏館、2019年）を出版したことについて、講座でお話させていただく機会を得た。

花山師（東大教授・金沢市西派宗林寺住職）は、東京裁判の被告の教誨師として、ご本人も重ねて書物にして刊行されてきた。ただ、88才の最晩年の回顧録音が、私の父の遺品中にあり、今や貴重であり、これを私はCD化して刊行した。ここから、ご本人の肉声でA級死刑判決となった東条英機や土肥原賢二らの、最後の言動の機微がうかがい知られる。そのため、テレビや新聞も注目してくれ、報道された。

花山師の教誨の基本はやはり親鸞にあり、最大の戦争責任者とされた東条は、花山師も感動するほどの念仏者となっていった。それを象徴する辞世が、「さらばなり 有為の奥山けふ越へて 弥陀のみもとにゆくぞうれしき」であっ

た。最期に、下士の米兵らにも礼の言葉をかけ、お念仏を称えつつ処刑台へ上ったという。これこそ真の平和の光景であり、日本人で唯一人この場にいた者の使命として花山師は、この光景を広く社会に伝達すべきと胸に刻んだようである。大学教授をつとめる傍ら、講演で全国をめぐったことも回顧する。

この教誨活動と戦争犯罪、そして処刑。ここから見えてくる課題は深刻である。“国家”の責任を個人が負う。その個人も巨大な権力を剥せば一人の「凡夫」であった。そして、それを裁いた側も凡夫である。人間の所業による戦争という重い罪業は、どこまでも人間を苦しめ、生命を危険にさらす。花山師の教誨活動は、仏教がこの愚かさを照らし出すはたらきとなっていることを、あらためて知らされることである。

（同朋大学仏教文化研究所 客員所員）

生涯を支える幼児期の教育

吉田 とき枝

介護を専門とする先生から「Last in First out」という言葉を教えていただいたことがある。最後に入った記憶を最初に忘れる・・・新しい記憶から忘れていく、という意味であると理解した。とすると、最後まで残るのは乳幼児期の記憶ということになる。

これまで講義では「幼児期の教育は生涯にわたる人格形成の基礎を培う」（教育基本法第11条）と何回となく説明してきたが、「Last in First out」という言葉に同居する義母の姿を重ね、「生涯」というのは本当に人生の最後までであると今更ながらに気付いた。

我が家の100歳になる義母は、幼い頃、弟妹を病気や事故で次々と失い、その分両親から大切に育てられてきたという。義母が認知症の今でも穏やかに生活する姿は愛情深く育てられたことと深く関係していると感じる。愛されて育ったことが人格形成の土台となり、安定した情緒や自己肯定感等を育み、穏やかに過ごす人生の終盤につながっていると思われない。

以上はきわめて私的な体験ではある

が、安定した情緒や自己肯定感などは、近年「非認知能力」として脚光を浴びている。

非認知能力の重要性はジェームズヘックマン教授が2006年に発表した「ペリー就学前教育」の研究成果によって証明されている。アメリカミシガン州で、1962年から5年間にわたって幼児教育を受けたグループと受けなかったグループに分けてその後の成長を追ったものである。その中で、ヘックマン教授は、「社会的成功には、IQや学力と言った認知能力だけでなく根気強さ、意欲、自信と言った非認知能力も不可欠である、幼少期の教育により認知能力だけでなく非認知能力も向上させることができる」としている。

この研究成果は幼児教育の重要性を科学的に証明し、日本でも教育要領等の改訂や幼児教育の無償化などの政策につながっている。

乳幼児期の生活が非認知能力を育み、その人の一生に影響することを考えると保育者という仕事の尊さを感じる。

(社会福祉学部 特任講師)

福祉の視点から見る 「生きる」ということの尊厳

工藤 隆治

同朋大学の建学の理念は、「同朋和敬」である。親鸞が示した、「同朋」は、聖徳太子の精神を表した、「和」と「敬」によって実現する。本学は、この理念を「共なるいのちを生きる」と表現している。親鸞は、「御同朋御同行」の考え方において、阿弥陀仏のもとにおける絶対的な平等の原理を説いている。この考え方は、福祉社会の構築の基盤となる社会連帯に通じるものである。

第2次世界大戦後、糸賀一雄は、重度の障害を有する児童への教育実践の過程で、「この子らを世の光に」という言葉を提示した。この言葉は、重度の知的障害児（者）が世の中を照らす光となる存在であることを表現しているといえる。

井深八重と岩下壮一は、ハンセン病の人達への支援活動に生涯を捧げた。井深は、1918年、ハンセン病を疑われ、私立神山復生病院に入院し、人生における絶

望を体験したが、病院長のレゼーと出会い、その人格に触れることにより、人生の考え方を大きく変えることになった。1922年、土肥慶藏博士の精密検査を受けたところ、井深はハンセン病に罹っていなかったことが証明された。しかし、井深は、病院にとどまり、看護師としてハンセン病の人達への奉仕を決断する。

岩下は、神山復生病院の院長としてハンセン病の人達と関わっていたが、日々の実践の中で、ハンセン病に対する不安な気持ちを打ち明けている。ここに、岩下の真の福祉実践者としての決意が表れているように思える。

人間は、同じ弱い心をもつ周囲の人達と互いに認め合い、敬い、尊重しながら生きている。人間は、同じ命を持つ人達と共に生きぬいていくことに尊厳がある。

(社会福祉学部 教授)

お伽草子に見る転生観

箕浦 尚美

人は死んだらどうなるのだろうか。現代においてもこの問いに対する答えは簡単ではないが、仏教には古くから輪廻転生という考え方がある。迷いの衆生は何度も生まれ変わって生死を繰り返すというものである。

日本中世の短編小説群である「お伽草子」には、子のない夫婦が神仏に祈って子を授かる話が多数あるが、その中に、夫婦に子種がない因縁を次のように語るものがある。

妻の前世は寺の近くにいた大蛇で読経を聞いたが魚達を食べた。夫の前世は鷹で同じく読経の声を聞いたが小鳥達を食べた。彼らはその經典聴聞によって裕福な人間に転生することはできたが殺生のために子種はない（『浄瑠璃御前物語』『月日の御本地』など）。

前世の動物が行ったことを現世の不幸の理由にすると理不尽な話であるが、そもそも輪廻転生の思想は、前世の悪因縁を説いて人々に罪業

観を持たせたりそれが宿命だと諦めさせたりする怖さを持ち合わせている（『善悪因果経』など）。上記の夫婦の因縁譚も一見そのように見えるのだが、物語内でこれ以上深く問題とされるわけではない。神仏が夫婦の強い願いにほだされて子種を探して授け、そして生まれた子が物語の主人公になってゆくだけである。つまりこの因縁譚の目的は、輪廻の恐ろしさを伝えることではなく、過去世の開示によって因果応報の道理を伝えることにあったと思われる。見逃しがちな事であるが、輪廻転生は迷いの世界のことであって、成仏や往生によって脱却できるとされている。お伽草子には転生譚が多く含まれているが、現実的な自分達の死後については、成仏や往生の世界を考えていたのだろう。そのことが因縁譚の扱いから読み取れるように思う。

（文学部 准教授）

所員

- センター主幹：安藤 弥（文学部 教授）
所員：箕浦 尚美（文学部 准教授）
所員：北島 信子（社会福祉学部 教授）
所員：岩瀬真寿美（社会福祉学部 准教授）
所員：市野 智行（文学部 専任講師）

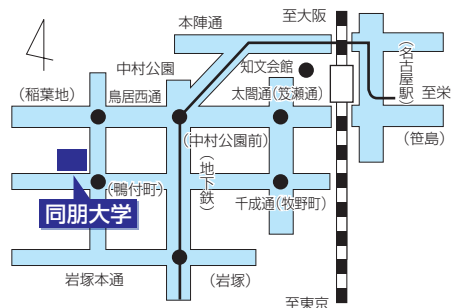
お問い合わせ先

同朋大学 “いのちの教育” センター

〒453-8540 名古屋市中村区稲葉地町7-1

☎ 052-411-1373

同朋大学 周辺地図



交通 市バス／栄又は笹島より②系統稲西車庫行、鴨付町下車
地下鉄／中村公園より⑨系統稲西車庫行、鴨付町下車